
 意見

心理学的幸福：動物福祉の新たな視点を考える

京都大学霊長類研究所 松沢哲郎

Psychological well-being: A new viewpoint of animal welfare

TETSURO MATSUZAWA

Primate Research Institute, Kyoto University

京都大学霊長類研究所に「類人猿行動実験研究棟 (エイブ・リサーチ・アネックス)」が建てて1年が経過した。建設計画の立案は1985年にさかのぼるので、構想10年にして実現した建物である(松沢, 1995)。さらにさかのぼって、室伏靖子先生のもとチンパンジーの人工言語習得研究が企画され、チンパンジーを導入して今年でちょうど19年目を迎えている。当初は、地下の陽のささない8畳ほどの広さの湿った一室があてがわれた。研究の進展とともに、チンパンジーがどういう知情意を備えた生き物かわかり、その生活環境を改善したいと切望するようになった。しかし、必要性だけ説いても予算はつかない。今ようやく、陽光をさんさんと浴び、木々が生い茂り紫陽花が花開き、小川の流れる環境(竹元・熊崎・松沢, 1996)でチンパンジーを飼育できるようになったことをすなおに喜んでいる。

ヒト以外の動物の実験的研究に携わる者として、動物福祉(Animal welfare)は日々直面する課題だと言える。実験動物の理想の飼育環境を何に求めるべきだろうか。そうした問いをこの数年胸に抱えてきた。京都大学霊長類研究所(1986)では、他にさきがけて、動物福祉の精神にのっとった飼育ガイドラインを制定した。日本霊長類学会(1986)や日本実験動物学会(1987)のそれより早い時期である。それから

10年、動物の飼育環境に関する最近の欧米の学界の認識はさらに進んでいる。学術誌の多くは、動物が、たとえばNIHのガイドラインに従って、適正に飼育されていたという記載のない論文は受け付けなくなっている。

とくに最近では、「心理学的幸福 Psychological well-being」という用語を頻繁にきくようになった(Novak & Petto, 1991)。アメリカ合衆国の動物福祉法(Animal welfare act)に1985年に修正条項(amendment)が設けられ、「飼育下の霊長類においては、その心理学的幸福を促進するような適切な飼育環境を整えなければならない」と規定された。アメリカ心理学会はそれを受けて、心理学的幸福とは何か、どう達成すべきか、といった観点から学際的シンポジウムをおこない、上掲書にその報告をまとめた。「心理学的幸福」が法制化された意義は大きい。動物福祉とって動物に接する心構えを説いたり、ケージの物理的なサイズを規定するだけでなく、飼育される側に立った心理学的な意味での「幸福」を考えるという、動物福祉を実現する具体的な視点が示された。この視点から言えば、環境エンリッチメント(Environmental enrichment)とは心理学的幸福を実現する具体的方策であり、たんに物理的環境の改変だけでなく、なかまとの出会いや、飼育者との関わりといった社会的環境の改変という側面も含んだ

方策だといえる。

実験動物のなかで、霊長類は特異な位置を占める。その高い知性はよく指摘されるが、わたしは以下の2点こそ重要だと思う。1) 本来、野生種である。2) 体が大きく寿命が長い。野生種だから、現在飼育されている個体も、その親、親の親とたどれば、わずかに数世代で野生の祖先に行き着く。そうした生き物を研究のため長期間飼育するには、心理学的幸福という視点から見た環境エンリッチメントが必須だろう。その際、霊長類のばあい心理学的幸福の原イメージは、野生での暮らしにあると考える。しかし、限られたスペース、限られた予算、研究目的による制約から言って、森の暮らしそのものを飼育環境として実現できないのは自明である。そこで、心理学的幸福のさらに具体的な指標を、以下の2点に絞って提案したい。1) 可能な限り、本来の行動目録 (ethogram) を満たす。2) 可能な限り、行動の時間配分 (Activity budget) を本来のそれに近づける。これが、行動という観点から見た「心理学的幸福」のひとつの定義だと考える。

チンパンジーをはじめ霊長類の多くは、集団で暮らす。起きている時間の大半は採食に費やしている。休憩時には他個体を毛づくろいする。実験動物としての霊長類の利用において、最近アメリカでは、複数個体をひとつのケージで飼育することが時代の趨勢になりつつある。それは、上記の観点で言えば、集団でくらしして他個体と接触し、あいさつし、毛づくろいするといった本来の行動目録を満たす努力と評価できるだろう。また、種々の給餌装置のくふうによって採食時間を延長する試みがある。それは、活動の時間配分の適正化という視点からできている (柳原・松林・松沢, 1994)。

ところで心理実験で用いられる動物は、多くは実験動物あるいは家畜として確立された品種であり、飼育下の環境こそがかれらの本来の環境だといえる。その点で霊長類とは本質的に異なる。しかし、動物福祉において霊長類だけを

特別視する根拠は薄弱だと考える。ここで提案した、1) 行動目録を満たし、2) 行動の時間配分を本来のそれに近づける、という心理学的幸福の作業目標は、霊長類以外の実験動物にも当てはまるのではないだろうか。キンギョ、サル、ラット、マウス、スナク、ヒツジ……最近の3年間だけ見ても、「動物心理学研究」は多様な動物の行動を扱っている。創刊号の頃をひもとけば、もっと多様な動物種が誌面を飾った。研究対象である動物種の心理学的幸福を探し求めることは、「そうせねばならない」飼育者の義務と捉えるべきではないだろう。本来の行動目録、本来の時間配分を知ることは、動物の心理や行動の研究にとって、いつの時代も王道になると思う。その視点は、プレマックの原理として知られる学習法則の基本アイデア (Premack, 1966) と同質のものだからである。かんたんに言えば、研究対象の動物が、本来自由に行動する機会を与えると、何を好み、何をどのくらい食べ、どこでどんなふうにとれくらい眠って、どのようにセックスして、どんなふるまいをするのか。そうしたくらしのディテールと全般を知ることが、心理学的幸福を背景とする研究の視点だといえる。

環境エンリッチメントにかんする行動プラン (Bloomsmith, Brent, & Schapiro, 1991) によれば、最もたいせつなことは、「とりあえずまずやってみようという姿勢 (A bias for action)」だという。そこで、動物実験に関わりヒト以外の動物の飼育に携わる者として、以下のような具体的な提言をおこないたい。1) 動物飼育のガイドラインのまだない研究室ではそれを新たに設け、既存のものは見直す作業をする。その際に、心理学的幸福という視点を検討する。2) 「動物心理学研究」に新たに設けられた「意見」欄などで、それぞれの研究室のようすや飼育の現状や環境エンリッチメントの取り組みを紹介する。3) 動物園・水族館など動物飼育に携わる方々、あるいは日本動物行動学会など動物行動の他の研究者と、環境エンリッチメントの具

松沢：動物福祉の新たな視点を考える

体的な取り組みに示唆を与える情報交換の場を積極的に設ける。4) 電子メールを活用し日常的な情報交換の場を創造する。ちなみに、筆者の電子メールの宛先は (matsuzaw@pri.kyoto-u.ac.jp) である。日本発達心理学会、日本霊長類学会がそうしているように、本会も電子メールのアドレスを名簿に加えるべきだろう。実際、この意見を作製するにあたって、電子メールで以下の方々から貴重なご意見・情報をお寄せいただいた。牧野順四郎、井深信男、児玉典子、実森正子、伊藤正人、石田雅人、南徹弘、岡市広成、藤健一、藤田和生(順不同)。深く感謝したい。

REFERENCES

- Bloomsmith, M., Brent, L., & Schapiro, S. 1991 Guidelines for developing and managing an environmental enrichment program for non-human primates. *Laboratory Animal Science*, **41**, 372-377.
- 日本実験動物学会 1987 動物実験に関する指針. *実験動物*, **36**, 285-288.
- 日本霊長類学会 1986 サル類を用いる実験遂行のための基本原則. *霊長類研究*, **2**, 111-113.
- 京都大学霊長類研究所 1986 サル類の飼育管理および使用に関する指針.
- 松沢哲郎 1995 チンパンジー研究の新しい道：類人猿行動実験研究棟の完成. *発達*, **63**, 114-120.
- Novak, M., & Petto, A. 1991 Through the looking glass: Issues of Psychological well-being in captive nonhuman primates. American Psychological Association: Washington DC. Pp. 285.
- Premack 1966 Reversibility of the reinforcement relation. *Science*, **136**, 255-257.
- 竹元博幸・熊崎清則・松沢哲郎 1996 飼育チンパンジーによる植栽樹の採食に見られる選択性. *霊長類研究*, **12**, 33-40.
- 柳原芳美・松林清明・松沢哲郎 1994 ニホンザルにおける飼育環境のエンリッチメント：給餌方法とケージ環境の検討. *霊長類研究*, **10**, 95-104.